**聖霊降臨節第17主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2023年9月17日**

**「喜びに生きる」**

**創世記12章1～3節**

**12:1 主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。**

 **12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。**

 **12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」**

**使徒言行録7章1～16節**

**7:1 大祭司が、「訴えのとおりか」と尋ねた。**

 **7:2 そこで、ステファノは言った。「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。わたしたちの父アブラハムがメソポタミアにいて、まだハランに住んでいなかったとき、栄光の神が現れ、**

 **7:3 『あなたの土地と親族を離れ、わたしが示す土地に行け』と言われました。**

 **7:4 それで、アブラハムはカルデア人の土地を出て、ハランに住みました。神はアブラハムを、彼の父が死んだ後、ハランから今あなたがたの住んでいる土地にお移しになりましたが、**

 **7:5 そこでは財産を何もお与えになりませんでした、一歩の幅の土地さえも。しかし、そのとき、まだ子供のいなかったアブラハムに対して、『いつかその土地を所有地として与え、死後には子孫たちに相続させる』と約束なさったのです。**

 **7:6 神はこう言われました。『彼の子孫は、外国に移住し、四百年の間、奴隷にされて虐げられる。』**

 **7:7 更に、神は言われました。『彼らを奴隷にする国民は、わたしが裁く。その後、彼らはその国から脱出し、この場所でわたしを礼拝する。』**

 **7:8 そして、神はアブラハムと割礼による契約を結ばれました。こうして、アブラハムはイサクをもうけて八日目に割礼を施し、イサクはヤコブを、ヤコブは十二人の族長をもうけて、それぞれ割礼を施したのです。**

 **7:9 この族長たちはヨセフをねたんで、エジプトへ売ってしまいました。しかし、神はヨセフを離れず、**

 **7:10 あらゆる苦難から助け出して、エジプト王ファラオのもとで恵みと知恵をお授けになりました。そしてファラオは、彼をエジプトと王の家全体とをつかさどる大臣に任命したのです。**

 **7:11 ところが、エジプトとカナンの全土に飢饉が起こり、大きな苦難が襲い、わたしたちの先祖は食糧を手に入れることができなくなりました。**

 **7:12 ヤコブはエジプトに穀物があると聞いて、まずわたしたちの先祖をそこへ行かせました。**

 **7:13 二度目のとき、ヨセフは兄弟たちに自分の身の上を明かし、ファラオもヨセフの一族のことを知りました。**

 **7:14 そこで、ヨセフは人を遣わして、父ヤコブと七十五人の親族一同を呼び寄せました。**

 **7:15 ヤコブはエジプトに下って行き、やがて彼もわたしたちの先祖も死んで、**

 **7:16 シケムに移され、かつてアブラハムがシケムでハモルの子らから、幾らかの金で買っておいた墓に葬られました。**

**私がここ諏訪教会に遣わされて約半年になります。ちょうど半年前の3月17日は静岡の家から荷物を運び出した日です。引っ越し業者が次々と荷物をトラックに積んでいき、荷物の搬出が終わり、荷物がいっぱいに積まれたトラックを見送った時、「ああ自分は本当に諏訪に行くんだな」と期待と不安が入り混じった気持ちになったことを覚えています。**

**神様から示されたところとはいえ、長老の皆さんとの顔合わせと3月12日の主日礼拝説教奉仕でしか行ったことのない、ほぼ初めての土地でこれから教会にお仕えしていく、そのことに不安を全く覚えないと言ったらそれは嘘になってしまいます。**

**信仰の父と呼ばれるアブラハムも神様から行ったことのない、初めての土地に行くように示されました。**

**「主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。**

**わたしはあなたを大いなる国民にし／あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。**

 **あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る。」（創世記12：1～3）**

**いくら神様の召しであり、神様が祝福して下さり大いなる国民にして下さるとは言え、やはり住み慣れた土地を離れて見ず知らずの土地に行くことには大きな不安があったと思います。アブラハムはそれでも神様に信頼して、自分を召し出してくださった神様がそのお言葉どおりに祝福して下さる。必ず神様が何とかして下さる、その思いを持って見ず知らずの土地へと旅立っていったのです。**

**このようなアブラハムの神様への大きな信頼が、神の民イスラエルの民の歴史の始まりです。アブラハムの旅立ちが大体紀元前2000年頃と考えられていますので、不当な裁判の場に立たされたステファノは約2000年前の話から今現在のことに至るまで約2000年分の出来事をその説教で語るのです。ステファノが語るのはアブラハムから始まるイスラエルの民の歴史であり、イスラエルの民がどんなに神様に愛されているのか、神様に愛されているにも関わらず神様を裏切り、神様から離れよう離れようとしてしまう罪の歴史でもあります。しかし、アブラハムを愛し、アブラハムを祝福し、また大いなる約束をして下さった神様は、神の民イスラエルの民がどんなに神様を離れて神様の前に罪を犯し続けても、決してお見捨てになることなく、愛し続けて下さるのです。ステファノが語るのはイスラエルの民の罪の歴史であると同時に、神様の愛の歴史、救いの歴史です。**

**お手元の週報の裏面には「2023年度第25週」と書かれています。これは4月から始まる2023年度の第25週目を迎えたということです。ですから、私がこの講壇に立ち説教をするのは半年を迎えた今日で25回目です。「25回続けて説教をして、すっかり板について来たな」と思われる方もおられるかもしれませんし、反対に「いやいや、まだまだだなあ」と思われる方もおられるでしょう。それはともかくとして今私が説教をしているのは毎主日の礼拝の中であります。礼拝の中でなくてはならない神の言葉を語る説教ですので、みなさんこうやって私が語る説教を静かに聞いてくださっています。私も聞いてくださるのを前提に説教の準備をし、祈り備えを進めていきます。**

**しかし、ステファノはそうではありません。主日礼拝の中で会衆の人たちが感謝を持って祈りを持って耳を傾けて下さる、語る牧師のために祈って下さる、その様なある種恵まれた環境の中で説教をするのではありません。ステファノのことを良く思わない人たちが人々を唆し、扇動し、偽証人を立てさせて偽りの証言をした不当な裁判の場です。自分たちの手を汚さずに何とかしてステファノを亡き者にしたい、そういった人の思いが支配しはびこっている、ステファノへの殺意に満ちている、それはステファノにとっては非常に不利な立場に立たされた中で語るのです。**

**そんな中で語るわけですから、私たちの感覚からすると「訴えのとおりか」と大祭司から尋ねられた時に、「いいえ、彼らの言うことは間違っています。私はそんなことを言っていません。彼らは私を陥れるために嘘を言っているのです。私が言いたいのは・・・」と自分を守るために弁明をしてもおかしくない場面だと思います。といいますか、普通ならそのように弁明して自らの身の潔白を語るでしょう。「そんなことは言っていない」と。**

**でもステファノは一切弁明の言葉を言わない、自分を守るための言葉は言わないのです。一切言わないで「兄弟であり父である皆さん、聞いてください。」とまず言ってから、アブラハム・イサク・ヤコブ・ヨセフの話をして神の愛の歴史を語るのです。自らに殺意を向けて陥れようとしている人たちに「兄弟であり父である皆さん」と言うのです。ステファノは反論もしないうえに「兄弟であり父である皆さん」と愛情を込めて言うのです。これは一体どういうことなのでしょうか。なぜステファノはこの絶体絶命のピンチの場面でこのような態度でいられるのでしょうか。**

**私は今日の説教題を決めるに当たって随分悩みました。どういう説教題をつけたら今日の個所が私たちに語りかけていることを表すことができるのか。そうして「喜びに生きる」という題を付けました。「喜びに生きる」この説教題からは今日の御言葉と簡単には繋がらないかもしれません。**

**私は説教題を考える中で、先週の聖書箇所で「天使の顔」のように見えたステファノが、微笑みを浮かべて説教を神の愛の歴史を語る姿が思い浮かびました。絶対絶命のピンチの中で自分を守るために饒舌になって必死で大きな声で神の愛の歴史を語る姿ではなくて、微笑みを浮かべて静かな語り口調で「兄弟であり父である皆さん、聞いてください」とやさしく喜びに満ちた姿で語りかけるステファノの顔が思い浮かびました。だから「喜びに生きる」と説教題を付けました。**

**「喜びに生きる」それは他でもない救われた者として生かされている喜びです。神様の長い長い愛の歴史の上にイエス様の十字架と復活によって罪赦されて生かされている、その喜びの中でステファノは静かにしかし的確に語りかけるのです。救われた者として生かされて歩むことができる、それはこの先どのようなことがあっても、神様は私を愛して下さっている、イエス様は私と共に歩んで下さっている、私は決して一人ではない、その喜びに生かされているからこそ、このような絶体絶命のピンチの中でも反論もしないし、「兄弟であり父である皆さん、聞いてください」とほほ笑んで心静かに語り始めたのではないかと思います。いえ、そもそも神様の愛の歴史を救いの歴史を微笑んで静かに語ることが何よりの反論なのです。「ここに愛がある。ここに救いがある。」そのことに気づいて欲しいのです。十字架の愛に気づいて欲しいのです。**

**教会って喜びに満ちています。イエス様の十字架と復活によって罪赦されて救われた者として生かされている喜びに満ちているのです。それは大きな喜びもあれば小さな喜びもあります。「こんなに素晴らしい経験をしたんだ」と皆で分かち合いたい喜びもあるでしょう。一人心静かにしみじみと味わう喜びもあるでしょう。**

**反対に苦しいことが多くて喜べない時もあります。そんな時は喜べない自分を責めてしまって何か神様に対して悪いことをしているような気がしてしまいます。だからこそ私たちは教会に行くのです。神様を礼拝し、イエス様の十字架の愛によって救われて生かされている、その喜びの原点に立ち返るのです。そして、教会の交わりの中で私たちは喜びに生かされていることに改めて気づかされるのです。私たちはこれからも礼拝を大切にし、御言葉に聞き、祈り、教会の豊かな交わりの中で喜びに生かされていきましょう。**